

---

# 先生との1年間

菅谷美奈子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

先生との1年間

### 【Zコード】

N9172D

### 【作者名】

菅谷美奈子

### 【あらすじ】

最初はただの先生だった。まさかこんなことになるなんて、夢にも思わなかつた。それに、離れる時がくるなんて、夢にも思わなかつた。思いたくなかった。そんな私と先生の1年間。

「怖い・・・・怖いよお・・・まじ怖いんですけどー。」

心の中で呟く、否、叫んでいる私。

目の前では小柄な男の先生。

低い声が、シンとした、緊張感のある教室の中で響く。

それは中学の入学式だった。

うちの地元の中学校の入学式は、殆どが午後のお昼を過ぎた時間帯から始まる。

母の車に乗りながら、卸したての真新しい制服を見る。

車の窓には青く綺麗な空。

そして、真新しい制服に身を包む自分。

私は事情があつて学区外からこの中学へ進学することになった。

事情というのも、ただ単に、自分が通う筈の中学が遠い。

それだけのことなのだ。

仲の良い友達と離れるのは少々残念だったが、この中学へ通うことになった。

この中学での知り合いは数人しか居ない。

元は同じ小学校の友達だ。

母は、

「あんたのことだから、なんやかんやで大丈夫よ。  
友達くらい作れる作れる！」

なんて、本当に他人事だ。

思わず、「本当に母親なの？」と聞いたくなるものだ。

車を降りる。

小学校の時、同じクラスだつた友達に会う。

母は「あらア～、こんにちはア～！」

なんて、独特の語尾の長さが気になるが世間話をしている。  
友達に話し掛けられる。

もつとスリルを味わいたいですよね、ホントにもー。

教室は4階。

土地が傾いているとかで、よくわからないけれど階段の数が異常に多い。

最低でも一年間、4階に行くには11の階段を登らなければならぬと思うと、やはり溜息が出た。

早紀とは別のクラスだが、私が1組で早紀が2組。  
体育の授業では合図らしい。

他愛もない話をしながら、互いに自分の教室の前で少し一やつしがら目を合わせた。

我ながら、やっぱり未だ子供染みてるといふがあるんだな、と思いながらも教室へ入る。

ガラツ！

と、勢いよくドアを開けてしまった。

少なからずだがドア付近の席の男子が此方を見る。

近くの席同士の者は、「あいつ誰だ?」みたいな顔を向けてくる。

私の席は、どうやら真ん中の1番前らしい。

名札を取りに行くべく、目の前の先生に話し掛ける。

「あのー・・・」

「ん?」

小柄な男の先生。

「ん?」という言葉を聴いただけで、結構声の低い先生なんだな、と、すぐわかった。

今まで保育園から小学校を卒業するまで、私は一度も担任の先生が男になつたことはない。

だから少し男が苦手だ。

父は単身赴任で居ないし、兄弟も居ない。祖父は、母方にも父方にも居ない。

「な・・・なふだ、いいですか?」

「ああ。名前は?」

「桜井……です。」

「下。」

は？

名札って、苗字だけでしょ？

何この人。なんて思いながら黙ってしまった。

「いいから。下の名前！』

結構強く言われた。  
怖い。

「！」・・・つ、小春・・・です！』

「ほい。』

それだけ？！

・・・それから席に座る。何か視線を感じる。

そう、田の前に居る変な男だ。

咳払いがまた怖い。

そして見られている！

「怖い・・・・怖いよお・・・おじ怖いんですけどー。」

私は少しきみに震えながら、心の中で呟んでいた。

式が始まるとこゝので、出席番号順に並ぶ。

私は「56番」。

女子の中で「6番」と思つてもいいのだと思つ。

出席番号「52番」と思われる子と、出席番号「64番」と思われる子と目が合つた。

勿論そこは笑顔でにっこつと。

因みの因みだが、先生の前では「明るくて真面目で、頑張り屋で努力家」というレッテルが貼られている私。

それは小一の頃から。

無論、私は友達の前でも「親切で、明るくて、いつも場を笑わせる」とこゝの役の設定だ。

自分で言うと可笑しくなるが、ここれは事実。

この2つのレッテルは必ず守り通さなければいけないのだ。だから、さつきのあの男にも、これをわかつてもらわないといけないのである。

例え嫌な先生でも、ぶりっ子して

「せんせえ～っ？」

なんて甘えれば、大抵の先生は落ちる。  
だからアイツも・・・あの男も・・・  
なんて思つていたのであつた。

そして式は終了。  
教室へ戻る。

そこで待ち構えていたのは小太りの眼鏡の先生だ。  
可愛らしい目をしている。

「いや～、『めんね！

僕がこのクラスの担任の・・・山崎孝男といいます。」

黒板に名前を書きながら、顔の汗をハンカチで拭いている。  
暑くはない筈だ。小太りのせいか、緊張のせいか、汗は尋常じやない。

「さつきの先生は副担任の大城康先生ね。  
数学の先生ですよ。あ、僕は音楽ね！」

だがクラスの皆は無反応。  
大分緊張しているらしい。  
皆机を見て、黒板を見ようとしない。

先生も苦笑していた。

そして明日から

華の中学校生活が始まろうとしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9172d/>

---

先生との1年間

2010年12月4日15時02分発行